

私立大学図書館協会2009年度西地区部会総会（館長懇話会）

「教育・研究・学習活動の場としての大学図書館の機能強化とは」

平成21年6月19日（金）

議長

参加館館長

司会　　そういたしましたら、これから館長懇話会を開催いたします。館長懇話会の進行につきましては、部会長校の本学館長が務めます。

お食事をずっと続けながらお聞きいただければと思います。本日、館長懇話会に57大学から出席を賜りました。ご多忙の中、ほんとうにありがとうございます。

資料を事前にお配りしているかと思いますが、資料をもとに館長懇話会を進めていきたいと思っております。資料の頭のところに趣旨というものを書かせていただいております。実は今回から、3月の前年度の役員会でお認めいただけまして、原則、館長の先生方に限って出席していただきまして、また以前のようにざっくばらんに図書館の現状についていろんなご報告等、お話をお聞かせいただければというふうに考えて、こういう規模で行っております。

ここでは別に何かを決議するとか、何かを決めるとかいうことはございませんので、時間が許します限り、できるだけさまざまな大学の状況等をお聞かせいただきまして、またそれをお持ち帰りいただきまして、それぞれの大学で図書館をどのように意義づけていくか、あるいは大学のほうに図書館の重要性をどのようにアピールしていくか、そういうふうなことの参考にさせていただければと考えております。

先ほども話に出しましたけれども、テーマは「教育・研究・学習活動の場としての大学図書館の機能強化とは」というふうにいたしました。これは、意図といたしましては、趣旨のところにも少し書いておりますけれども、どんどんどんどんと大学の中で経営上の問題等で人員削減が行われたり、図書館からまずねらい打ちされるといいますか、人減らし、それから予算減らし等のことが起こってきている。

こういうふうな状況の中で、やはり大学の中で図書館というものが重要なんだということを我々としては主張したいということで、そのためにはどういう役割があるのかと。各大学でどのようなことをされているのか、教育あるいは研究、学習という面、3つに一応分けましたけれども、それぞれについてこういうことをやっている、うちではこういう効果が上がっているとかいうふうな事例がございましたら、ぜひざっくばらんに話しいただければというふうに考えております。

まず、ざっとアンケートにつきましてご説明を申し上げます。食べながらで恐縮なんですけれども、資料の2ページ目のところに集計結果を載せてございます。とりあえずお耳だけでと思いますけれども、回答校数127校、約半数の大学からご回答をちょうだいいたしました。

図書館の設置目的というところで、まず、一応どのような設置目的で、総合図書館なのか学習図書館なのか研究図書館なのかということをお聞きしましたけれども、ちょっと判断に迷って両方お答えの方とか、同じ大学の中に2つあるとか、いろんなことがございまして数は127を超えておりますけれども、大体が総合図書館であるというような結果が出ております。

ただ、学習図書館とか研究図書館という特色を持たれた大学が幾つかあるということもこれでも明らかになりました。本日は、一応、教育・研究・学習と3本に立てましたけれども、おそらく皆様の中でも教育と学習はどう違うのかというふうなご疑問をお持ちになられた方もいらっしゃると思いますけれども、こちら側の意図といたしましては、教育というのは先生方のいわゆる講義と直結しているもの、講義に準ずるもの、そういったものを教育、それに対しまして学習と申しますのは学生たちの自主的な学習の場としての図書館の役割、このように大きく分けてございます。

ここのアンケート結果でございますけれども、教育の場としての図書館といたしましては、どのような重点的な運営をなさっているかということにつきまして、まず教育用コレクションの構築、これが一番多うございました。その次に、教育を支援する情報リテラシー教育、これはあくまで授業支援としてでございますが、授業の一環の中で行われている情報リテラシーの教育についての答えがございました。それから、3番目としまして、各図書館にグループ学習室等を置かれていると思いますけれども、それを授業に利用している、あるいはゼミとかに利用しているというふうな例が幾校かからございました。

図書館と申しましては、これまで資料を蓄積した、言葉は悪いですけど倉庫のようなイメージでとらわれたりしますけれども、このごろではやはり図書館を活用して教育と密接に関連づけていこうというふうな流れがこれでも感じ取られるというふうに思われます。特に、図書館の利用の仕方がわからない学生が増えているので、1年次、初年次教育等において図書館の役割は大きいものと存じます。本学でも1年次の授業のところで図書館実習を1こま、各先生方の授業の1こま目に利用しているというふうなこともございます。

次に、研究の場としての図書館運営でございますが、これは研究用のコレクションの構築が重点的に行われていますけれども、最近の傾向としまして研究成果の情報発信、本学でいいますと学術リポジトリと呼んでいるものでございますけれども、こういったものを発信していく場所が図書館という

ところになってきている。情報メディアの発展に伴いましてさまざまなメディアを扱うようになってまいりましたが、そのこととも関係してはいますが、このことが非常に多くなってきているのではないかと。

それから、3つ目に研究用個室等の図書館施設の提供ということで、これは各大学でも、アメリカとかオーストラリアの大学でもありますけれども、先生が図書館に来られて個室を借りて、そこで研究室がわりに使うというふうな利用方法、これが最近少し増えてきているように思われます。1つとしては、やはりリサーチライブラリーとしての要素としてももちろんございますが、先ほど申しましたように、情報発信、社会還元、こういったものがキーワードになってきているかなという感じがいたします。

それから、3つ目、学習の場としての図書館運営でございますが、学習用のコレクションの構築というのは、先ほども申しましたように教育用コレクションと重なるんですけども、より自由に学生が自主的に選ぶ推薦図書でございますとか、そういったもの。あるいは、授業以外のものにつきましても先生からの指定図書があったりとか、リザーブブックを置いたりとか、授業とも関連しますけれども、さまざまな自主的な学生の学習に貢献する関連資料を選ぶというふうなことが大分増えてきているかと思えます。

ご存じのとおり、学士力の保証、質保証の観点から、単位というものが授業だけではなく、予習・復習の時間を含めて2単位であるというふうなアメリカ的な考え方が文科省のほうでももう一度再確認されて我々のところに提出されてきております。そこで、予習学習用に参考図書を常備するというふうなことが非常に重要な点かと思われます。

アンケートとしましては、重点的に学習用コレクションの構築、それから次ですが、やはりレファレンスあるいはガイダンスの利用サービスの人的支援ということが非常に大きな問題となってきます。これは、重要度はどんどん増しております。先ほども少し申しましたが、情報があふれ過ぎていて、それが正しいか正しくないか、あるいはどこからどうやって選んでいいかがかえって難しい状況の中で、レファレンスというジャンルが非常に重要になりつつある一方で、人員削減という相矛盾するようなことが図書館に関して起こってきている。そのことがやはり大きな問題かと思えます。これは課題としての検討、やはり利用サービスの人的支援が非常に今、問題だというふうなお答えをかなりたくさんちょうだいいたしました。

それから、自学自習場所の提供というもの、これも図書館の役割として今後必要になってまいるかと思っております。といいますのは、どうやって学生を大学に居続けさせるか、あるいは居場所をど

うやって確保するか、そういう要請の中で図書館が1つ、役割を果たしていくということがあり得るかと思います。

それから、今回のアンケートで自由なご意見もたくさん書いていただきました。気がつきましたところでラーニングコモンズというふうな言葉、キーワードが幾つか出てまいっております。

図書館がこれまで静かな学習環境を提供するものであったのに対しまして、アメリカ的なグループ学習の場、そこにはもちろんパソコンを用いてみんなでレジュメを作成したりするような、そういう場について図書館が姿を変えていくというふうなところが若干見てとれるようなアンケートがございました。ただ、これにもものすごく人的、あるいは場所、そういったものの困難さが伴うことは言うまでもございません。

大体がアンケート結果からなんですけれども、やはり今後、図書館がどう変わっていくか、これはまだ今のところ見えていませんけれども、明らかに今までどおりではない図書館像が近いうちに広まっていくであろうということが伺えますので、先進的な取り組みをされているところであるとか、あるいはこういうところで困っているとか、さまざまのような点でもかまいませんので、各図書館長の方々、ほんとうにざっくばらんにご意見をちょうだいできればと思います。

ちょっと時間は限られておりますが、教育、研究、学習と一応テーマを分けまして、その順に何かございましたらご発言いただきたいと思っております。まず、教育の場としての図書館運営から懇談を進めていきたいと思っております。何か特色的なこと、あるいはアンケート結果についてのご意見等でもよろしいので、何かございましたらご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

ちょっと先鞭を切らせていただきますけども、特に先端的なことはやっているつもりはなくて、今おっしゃられたようなことしかやってないんですけど、困った点についてどのように工夫されているかということについて皆様方にお伺いしたいなど。

それは、教育の当然一環としまして、貴学と同じような形で、こちらもガイダンスを行っておりますけども、1年生の基礎ゼミの最初とか、あるいは2年次、3年次のゼミナールで図書館ガイダンスと。中身はそれぞれ、1年次、2年次、3年次では異なっておりますし、また教員側の希望でその内容も入れかえておりますけども、問題は時間割との関係で、例えば基礎ゼミなら基礎ゼミで同じような時間帯ですずっと入れ込むとしますと、先ほど最初の1時間目とおっしゃったんだけど、現実にはなかなか難しい。

今も4月から6月で何とかこなそうとしていますがけれども、なかなか時間割上の問題でもって思うように入れ込めないと。やっぱり少人数で、館内ツアーなんかも含めるとあまり大人数で連れ歩く

わけにもまいりません。多くても20人以内という形でないと利用者に迷惑をかけると。これをどう  
いうふうにおやりかなという点、お教えいただければと思います。よろしく申し上げます。

ありがとうございます。

今の件で、いかがでしょうか。何かご意見か、工夫されている点とかございましたらと思うのです  
が。

うちは1年生用の図書館オリエンテーションと、2・3年生用のオリエンテーションと、それ  
から卒論を控えた4年生用のオリエンテーションと、3つのグループに分けてオリエンテーションは  
小まめにしております。

1年生用のオリエンテーションは新入生オリエンテーション、一般的な大学の学びのイントロの段  
階での一環として、基本的に全学部・全学科、日にちを1週間ぐらい分けて連日、学部・学科ごとに  
図書館オリエンテーションをしております。これは新入生オリエンテーションの一環であります。

2・3年生用は、一般教養的なところから専門の分野に入りかけている学生を対象にしてやってお  
ります。どうするかといいますと、4月から5月にかけて随時、各学部・学科の教科担当の先生が申  
し込むわけです。それを日時ごとに分けて、小まめに大体20人ぐらいのグループで案内すると。基  
本的にはOPACの利用の仕方、それから閲覧、開架閲覧図書、学内の書庫にある図書、こういう内  
容を説明しております。

それから、3つ目の4年生用のオリエンテーションは、卒論を控えておりますので具体的に実物を  
手にとって見る、現場に連れていくと。通常、館内の開架以外は、書庫は学部の2年生までは見られ  
ないんです。そこで、3年生後半から4年生の学生に対しては書庫内の閲覧をさせるということで、  
特別許可を出して書庫内閲覧をすることにします。ゼミの先生が引率して、通常など見られない書庫  
内図書ツアーをするという、3段階、3種類ぐらいのグループに分けて少人数でっております。

以上です。

貴重な情報をありがとうございます。

その場合の人的支援と申しますか、今、書庫内ツアーはゼミの先生が引率されるとおっしゃいまし  
たけれども、1・2年の場合は人的にフォローできているんでしょうか。つまり、数が要るかと思う  
んですけれども、いかがでしょうか。

端的に申し上げまして、厳しい状況ではあります。うちの大学は業務委託しているんです。業  
務委託することによって大学所属の教員よりも相当人数が増えているんです。それで、その業務委託  
している職員の方々のローテーションで、1回、2人ないし3人、アテンドしながらやるということ

で、私は最初に聞くのは、これが仕事の負荷とならないかどうかです。業務超過にならないかどうか、職員さんに負担がかからないかどうかということをも確認しておきます。

それで、ローテーションでかなり細かく日時を限定しておりますので、わりとうまく今のところは回っているようです。1日、大体2グループか3グループごとにやっております。ということです。

ありがとうございます。ほか、何か情報等、ございますでしょうか。どうぞお気軽にお願いいたします。どうぞ。

今の初年次学習としての図書館のあり方、やはりこれは、大学生は高校までの図書館の使い方と大学での図書館の使い方は大きく変わると思うんです。まず、規模が全然違うと。本の冊数にしても資料の規模にしても全然違うわけですから、非常に学生は戸惑うと思うんです。それと、今日のいろんなお話にもありましたように、学生が活字離れして本離れしている中で、どのようにしたら図書館に足を向けさせるか、運ばせるかということは図書館の1つの課題ではないかと思うんです。

そういうときに、やはり新入生オリエンテーションというのは、OPACの使い方とか、非常に重要な働きになるんじゃないか。本学の場合は4月の末ぐらいから、うちは5,000人ぐらい学生がおりますけれども、全学生対象に新入生オリエンテーション、これは基礎演習の時間を使っております。従来は、大体1日に4ゼミぐらいを図書館の職員4人ぐらいが分担して図書館を案内すると。

ところが、今年から少し効率性を考えましてAVホール、うちのAVホールは約100人入ります。基礎演習のクラスが大体20人前後ですから、4ゼミ、80人を一堂に集めまして、そこで図書館の職員が説明をしながらやっております。これが大体新入生のオリエンテーションのやり方でございます。

それから、2年生になりますと、今度はレポートの書き方ということで、今回の使ったビデオは「情報の達人」というのがございまして、情報をどうやって収集していくかということを図書館の職員が、これも先ほどの1年次のオリエンテーションと同じように、今度は2年次の基礎演習がございまして、この2年次の基礎演習でレポートの書き方、その辺を説明していくというふうな形で図書館の活用方法をやっております。以上です。

ありがとうございます。

ほぼ100%、そういうことを学生にやられているということで、図書館の存在意義がかなり大きいというふうなことだと思います。なかなか規模の問題とかもございまして、全部の大学に同じことはいかないと思いますが、非常に貴重なご意見をありがとうございました。

ちょっと補足しますと、人的資源、その場合の職員の問題です。これは、大体うちは職員で間

に合っております。

ほか、いかがでしょうか。一応記録はとっておりますけれども、責任を問われるようなことはないと思いますので、どうぞ自由に。

本学は、専門大学の図書館ですので、いわゆる窓口の対応はただの司書資格だけでは済まない部分がありまして、音楽についてのある程度の知識が必要なものですから、パートで卒業生を大量に使っております。

先ほどの大学のほうのお話にありましたように、実は去年から短大、今年度から大学のほうでも初學者教育を半期やるようになりまして、その中にライブラリーツアーを1こまだけとりあえず組み込んでくれということを経引に私のほうから教育部長にねじ込みまして、教育部長もぜひそれはやりたいたいということで受けてくれまして、一応6月まで、きょうはこのクラス、きょうはこのクラスというように分散させて、1クラス30人ぐらいをAVのほうの視聴室と閲覧室というふうに2つに分けて、書庫内を見せることとか、それから初めはまとめてコンピューター室でOPAC検索の練習をさせるというようなことをやらせました。

一応今年度の分は全部終わったんですけども、これはまだ統計をとってないんですけども、何となく感じとしては図書館の利用者が増えたというのを窓口の人たちが全部言っております。それから、ツアーの案内を卒業生のパートの人たちにやらせたんです。そうすると、自分たちの先輩がやってくれているということで非常に熱心だし、よく聞いてくれて、図書館に非常に関心を持つようになった。その点は非常に効果があったと思います。

それぞれの初學者教育の担当教員というのがクラスに1人ずつちゃんといっているんですけども、その人たちからのアンケートでも、ライブラリーツアーは非常に効果があったというようにアンケートの答えは返ってきております。来年はそれを2こまぐらいに増やしたいなと思っておるんですけども、なかなか人員配置の問題とかでいろいろ厄介なことは残っております。参考になれば。

ありがとうございます。

そのときの1こまは、15こまの半期の分にカウントして1つとして入れてあるわけですね、1回目か2回目ということで。

初學者教育は、一応その担当の教員全体で打ち合わせをして一通りのカリキュラムはつくってあるんですけども、その中で、ほかの専門の先生を呼んできたりとかいうことで自由に組むことができるんです。その中に図書館を1つ入れてもらったということです。

もう1つだけ。卒業生の方を案内につけたということは、卒業生の方々、OBの方に対してこ

ういうことをしてくださいというような指導みたいなのはされているんですか。

単に卒業生ではなくて、それが図書館の窓口担当としてパートで雇用しているわけです。

共通のカリキュラムみたいなことは、ごめんなさい、私ばかりしゃべって、非常に興味がありますので。

共通のカリキュラムというよりも、主立ったスタッフ何人かでこの時間内にこういう形で進めればいいんじゃないかというカリキュラムをつくって、私が監修して、これでいってくださいというようにして、そのストーリーに従ってやっております。

ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。どうぞ。

どの図書館でも学習用コレクションの構築というのは、今はすごく精力的に取り組まれているということは非常にこの調査でわかるんですけれども、本地区から教員推薦図書コーナーを設置するという、これをちょっと報告しておりますのでご紹介させていただきたいと思います。

これは、私どもの大学と他大学の2校で共同図書環という、この「環」はリングという意味ですけど、文科省から承認をいただいて構築事業を今行っていて、3年間で1万冊の教育用図書をコレクションする予定になっています。これは全部シラバス連動で、1年目は教養図書、教養の科目のシラバス連動図書というのを集め、今年2年目に入っていますけれども、今度は専門導入、だから概論・総論に相当するようなシラバスの関連図書、それから来年は純粋専門図書というのをコレクションすることになっておりますけど、1つは教員が推薦します。

それから、学生も選書ツアーというのがありまして、先生の指導のもとで書店に直接行きまして、学生が1人1万円ぐらいでしたか、1ゼミで10万円というような形の選書ツアーというのもありまして、選書したのはすべて書評を書いて、先生も書評を書く、学生も書評を書く、それから読んだ者も書評を書いてそれを掲載する、それをネットで見られるというような状態で、各大学が別のコーナーを設けまして、そういう選んだ図書を特別に収納するという形になりまして、それで学生はそれぞれの自分の図書館から請求して、図書が大学に来るという形でリンクを持って、物流のほうは負担をして、その図書館に行かなくても学生が読めるような状態をつくって、そういう形で地域連携、近くの6大学と1つの地域の図書館と連携した事業が進んでおります。

これは、今後どういう展開になるか知りませんが、シラバス連動の地域連携のコレクションができ上がって、学生が共同で使えるようになるんじゃないかということで期待しております。こんなことがありますので紹介しておきます。

ありがとうございます。いかがでしょうか、ほか。

そうしましたら、研究用のほうにも話を進めまして、順番にやっていきまして、また戻っていただいても結構ですので。今、非常に貴重なコレクション構築の話をしていただきました。コレクション構築に関しましては、やはり教育用と学習用はもちろん、非常に微妙に重なってくるかと思えますし、研究用も最近では重なってくるところがあるかと思えます。

そのほかに研究の場というところでは、例えば最近、先ほども申しましたけれども、リポジトリなどの情報発信等が非常に求められてきている。その一方で、著作権等の問題もあるとかというふうなさまざまな状況がございますけれども、いかがでしょうか、何か研究用でこういう情報発信の特色的な試みをされているところとか、ございますでしょうか。

研究用につきましては何かお口が重いようでございますけれども、私もさまざまな情報系と同じ組織でございます、いろんなCIOフォーラムとか出ましても、研究に関しては国立大学のほうは非常に潤沢な予算をお持ちで、研究について滑らかなんですけれども、私学から出ていった我々のところはやっぱり口が重くなったりとかいたしまして、どっちかという教育のほうに力を入れていかないとなかなか生き残りは難しいのかなというふうなことを感じた場もございました。

後で戻っていただいても結構ですのでちょっと話を進めさせていただきますが、学習用の場、これは非常に私も個人的にもお聞きしたいんですけれども、学生に図書館をどのように利用させていくか、このようなことで何かご意見か、お話しいただければと思います。いかがでしょうか。

何か独自の環境をつくっておられるとか、ラーニングコモンズ的なものとか、いかがでしょうか。どうぞ。

学生用というところで、発想の転換を2年前にさせていただきました。それまでの図書館の中は「静粛に」という張り紙があちらこちらにあった。しかしながら、今の学生のいろんな勉強の仕方を含めて、先ほどちょっとお話がありましたけれども、やはりゼミでの事前学習を含めたグループ学習なりグループの打ち合わせというのが多くなってきましたので、完全に場所は分けているわけではないんですけれども、大体この閲覧室に関しては静粛に、しゃべらせないということにして、パソコンがあるようなところについてはある程度隣同士でいろいろパソコンを見ながら操作してしゃべってもクレームも来ないような形で、ある程度しゃべりながらの作業を行わせると。

そして、さらにグループ学習室、今5部屋ばかりありますけれども、このグループ学習室は授業にも使えますけれども、あいているとき、あるいは事前予約をしておけば学生のグループ等が自由に使える。ここは完全に当然しゃべることもできますし、それから無線LANを通してありますので、大学の図書館のほうでノートパソコンの館内用の貸し出しもしております。それを持って行って、それ

からあちらこちらから本を持ってきて、それを使いながら、インターネットを使いながらの作業をすると。

これを始めましたところ、その1年間、18年度から19年度にかけて大体30%の利用率が増えたと。昨年度は図書館が7カ月ばかり実は閉館した、アスベストが見つかったりしたもので大規模な改装をした、それがありませんので資料はありませんけれども、今年度の4月、5月、6月の状況を見ていますと、おとしよりも利用率はもっと増えております。これも大分、教員の見方、それから職員のほうもおとしあたりはちょっと声を出すとしかる職員というのがいたんですけども、こここのところの意識を変えていただいて学生のほうも使いやすくなったと。一応こういうような傾向がこれからもう少し続くのかなというふうに思っております。 以上です。

ありがとうございます。

今のご意見に、情報について等でも結構でございますけれども、何か。 どうぞ。

今のご意見と関連するんですけど、今の学生さんというのは図書館で静粛にといっても1時間もつかもたないかなんです。隣同士で雑談し出したり、携帯をやり出したり、中には食べ物を持ち込むと。発想の逆転になるかどうかわかりませんが、私どものところはミュージアムをつくったんです。その改築に合わせて、私、前に一度図書館長になっていましたので、そのときのことで、6年前、2つの大学を見学させていただきました。両方に共通しているのは、図書館に併設して屋上のオープンテラスをつくっているんです。

私は、これは外で音を遮断すれば、本を持ち出しておしゃべりしながら学べるというか、意見を言い合えるということで、図書館の室内に併設して屋上にテラスを2カ所つくりました。ピオトープをつくっております。屋上庭園ですね。小さなものですが、2カ所あります。そこは、下は板敷きになっているんです。コーヒーぐらいは持ち込めると。これはアメリカやイギリスにあるシステムなんですけども、私はそれをどうしても実現したかったんですが、学長は大反対でした。空間がもったいないという、室内にして本を置けと。無理やり独断でやらせていただきました。

結局、鳥が来たり花が咲いていたりするので、そこでコーヒーを飲みながら学生が自由におしゃべりをできると。それで、一段落ついたらまたガラス戸をあけて室内に入ってくると、そういう環境にしておりました。ただ、あまり利用がないんです。

本は外に持ち出せるんですか。

一応持ち出せます。

飲み物を飲みながら本を読むということも。

はい、一応。これは図書館の職員から大きな反対がありました。それも押し切りました。

今、アメリカとかの話が出ていましたが、ラーニングcommons、それからアメリカの場合、インフォメーションcommonsという名前で置かれていたりとか、私、この前オーストラリアを見てきたんですが、インフォメーションセンターとかラーニングセンターとかいう形でよく似たようなことがなされているようでございますけれども、ほか、いかがでしょう。どうぞ。

この4月から館長になったばかりなので、まだあまりよくわかってないんですけど、ちょっと学習用ということで2つのお話をさせていただきたいと思います。

1つは、私どもの大学には2か所のキャンパスがありますが、1つのキャンパスには図書館が3つあるんですけど、ちょっと1つは特殊なので、大きなのは2つあります。そのうちの1つが研究主体で閉架の状態の感じのものと、それからもう1つは学習、まさに学生向け用ということで、おのおの2,000平米ずつぐらいあるんですけど、学習支援用のほうは図書館がある建物の上にも教室がありますし、すぐ囲むように両隣に教室等がありますので、そこに毎日何千名かの学生がいますので、ちょうど授業の前とか後とか、終わった後に結構だっと来るわけです。

その図書館は、学生が気楽に見られる図書が10万冊ぐらいあって、閲覧席が450席ぐらいなんですけど、ちょっと込む月だと1日平均で2,000名を超えます。7月の定期試験のピークだと4,000名ぐらい来て、あふれる状態でパンク状態です。

もう1つの研究用のほうの図書館は、そこよりはちょっと100メートルか200メートル離れていることもあって、そこも閲覧席が500席ぐらいあるんですけど、1日平均二、三百人ぐらいしか来なくて非常に使用効率が悪いということで、ちょっと今、建てかえを計画しております、そこは今度、研究だけじゃなくて学習支援用という兼ねたものにして、そちらにも今、学生が流れるようにしようと思っています。やっぱりどんとでかい図書館というのではなくて、ややコンビニ的に学生がすっと入れるような図書館というのを学生にも便利なように何カ所も設ける、そうすれば随分来てくれるというふうに私は思っています。

それが1点目と、さっきからラーニングcommonsというお話が出て、ちょっとまだそれがどういうものか私はあまりよくわかってないんですけど、それは図書館じゃないんですけど、私はもともと情報系の学部に所属しておりますので、そこにももとはコンピューターガーデンといって、周りに先生の部屋があって、その真ん中のところにインターネットでつながっているコンピューターが利用できる環境があって、脇にちょこっとだけ本が置いてあるんですけど、そこをもう少し本を充実すると、私はそこが1つのある意味でいう、いいラーニングcommonsじゃないかというふうに思う。

それはなぜかという、今、いろんな情報は紙ベースの書籍から入手することと、インターネットのようにネットワークを通して電子的に情報を入手する。もう1つ大事なものは、周りに相談に乗ってくれる教員とか先輩がいるという環境が要る。今、私どものところのコンピューターガーデンと呼んでいたところをうまく改良すれば、まさにラーニングcommonsという1つのスタイルがとれるんじゃないか。やっぱりもう少し図書館にもいろんな意味で教員というか学生に、どういう本を探したらいいかということじゃなくて、何か学生が学んでいるときに気楽に相談に乗ってくれる先輩や若い先生がいるとか、そういう環境も含めていい環境を整えるということが大変大事なんじゃないかなと思っています。

なかなか、そうはいってもいろんなお金も問題もありますから、そう簡単にはいかないと思いますが、今ちょっとそんなことを考えております。

ありがとうございます。

今の貴重なご意見なんですけど、ラーニングcommonsの場合、やはりおっしゃったとおり、ずっと相談に応じてくれる人がいるということが必要かと思うんですが、理系の先生方の場合だと、例えば朝9時から実験のためにずっと大学にいるので学生とも近いということがあるかと思うんですが、これまでの日本の大学の文系の風土でいうと、大学の先生はなかなか授業以外のときには出てこないの、研究室に行ってもいないというふうな状況がかなり多かったと思うんです。

アメリカやオーストラリアなんかは、やはり9時 - 5時で先生が必ず研究室にいます。そうしましたら、そこにそういうのを置くとまさにラーニングcommonsになるということ、おっしゃるとおりかと思うんですが、今の問題で、例えば図書館員以外の人が複合的に図書館と同じような仕事をしているということが可能なのかどうかということも大きな問題だと思うんです。今の先生がやってくれるとか、図書館に置くかどうかは別にして、そういう場が置けると非常にありがたいというのはおっしゃるとおりなんですけど、そういう工夫か、何かそういうことが行われている大学さんはいらっしゃいますか。どうでしょう。

例えば、就職関係のものと一緒に仕事をしているとか。ないですか。そこに行けばいろんなこと、図書館の情報もだけれども、他の情報も得られるというふうな場所があるとか。なかなか難しいですか。やっぱり縦割り社会ですね。多分、日本の職場というのがそういう作り方をしているからだと思うんですけども。

何か今の話を聞いていると非常にうらやましいような感じで、そういう場ができればなと。そこに図書館のレファレンスも1つ入っている、あるいは情報のITのサポートのオフィスがあるとか、あ

るいは学生センターの窓があるとか、こういうのがあると非常にまた図書館の像も変わってくると思うんですけども。

ほか、いかがでしょうか、何か。どうぞ。

本学は芸術系ということで、いろんな芸術の分野の領域が網羅されている学科がたくさんあるわけですけども、先ほど先生方のお話を聞いていまして、やっぱりどうしても図書館の利用の学生数が少ない、低減しているということで、本学も新入生向けの図書館ツアーとかOPACの指導とかやっているわけですけど、なかなか入場者の数が増えないということで、本学の特性を生かしまして、ギャラリーというのは別の場所にあるんですけども、図書館を一度ギャラリーがわりに使ってみようということで、毎年たくさん蔵書が増えていくわけで、できれば図書館の本を置く場所の確保というのも重要なんですけども、空き空間を利用しまして学生の団体のいろんな立体から平面から絵画、それから焼き物とか、そういうものを展示する場として提供したんです。

これは図書館主導ということで、学生のそういうふうな創作集団、中には卒業生も含まれていますが、在学中心の集団と協力しまして昨年度やってみましたら、その前後、入館者が非常に増えまして、継続的にいろんな催し物、展示をやりまして、その都度入館者が増えたということで、本学の場合、通信教育もありますので、開館日というのが年間非常にほかの大学さんに比べるとたくさんありまして、ほとんど図書館というのはフル稼働みたいな状態なんですけども、なかなか以前から入館者の数が増えなかったというので、大学の特性を生かしてそういうふうな試みをしました。

ありがとうございます。

実は、私、貴学に10年以上、非常勤で行かせていただいております。小説の書き方を教えているんですけども、文芸学科ですけども。文芸学科で教えていても確かになかなか図書館に行かないということを学生から聞いたりしているような状況でございました。

今ありましたけど、図書館のほうでそういう、ライブラリーも含めてですけど、何かミュージアム的にと申しますか、展示とかされているということはございますでしょうか。

実は、本学のミュージアムは6年前にできまして、これは常置のミュージアムでして、月に1回、読書会をしております。市内の本ミュージアムに関する作家のファンが30名ばかり、実は26日にあるんですが、月に1回やっております。これが1つ。

それから、もう1点は、先ほどの先生がおっしゃっていましたが、ミニギャラリーを始めました。これまで4回なんですけど、3回は先生の水彩画展。これは、ごく狭いところなんですけども、先生が自分のかいた水彩画をずっと並べてとても好評でしたので、先々週から2週間は中国系の先生の書道

展、篆書です。これも大変人気がありました。

これを今後、断続的に続けていこうというので、まず専任の教員の方々から立候補をするという指示を出しました。絵でも写真でも、彫刻でも何でもいいと。隠し芸を見せる会というの、これはとても学生にも人気があって、次に専任の教員のほかに専任の職員の方々にも公募をして展示してもらおうと。さらに定着してくれば、今度、非常勤の先生にも開放しようという段階まで来ております。以上です。

ほか、いかがでしょうか。

非常におもしろい試みをされて。貴学のミュージアムは非常にいいですね。大学の組織として非常にいいかなと。

ありがとうございます。ついでにもう1つだけ宣伝を。

うちのような中小の弱小大学は広報を今までしてなかったんです。広報ついでにさせていただきますと、この4月に市とうちの大学とが提携を結びました。というのは、市はこれから何か文学の町をキャッチフレーズにするということで、文学・芸術に力点を置いた市の活動を展開するということで、本ミュージアムの作家がこの市に住んでいるので文化交流協定をしまして、市が本ミュージアムを宣伝してくれる。うちの大学は市を宣伝する。あわよくば大学の受験生も増えへんかなという、そこまで行かないと思いますけど。ということで、再来週、市長が見学ツアーを、市民が30人、バスでやってこられます。

以上です。

実は私、その作家を専門で研究しているんです。講談社文庫の解説を3つほど書いているんですけど、きょうは何かそんな話ばかりで申しわけないですけど、個人的に非常にうれしいです。この話はいいとして、私も先生からもらったはがきがありますので展示してもらおうかなという。

ほか、いかがでしょうか。もうそろそろ時間ですので、テーマにこだわらずに何か。

どうぞ。

今年の4月から館長になりまして、ほんとうに何もわからない中でやっておりますけれども、いろいろお話を聞かせていただきまして大変勉強になっております。

それで、うちのように小さい大学ですと図書館の存在というのが、戦わないと存在できないということを最近気がつきまして、どういうふうに大学にまず図書館の存在をアピールするかということを考えているんですけども、やはり学習支援ということがこれからすごく大きな役割を占めてくるんじゃないかと思っております。

それで、さっきカリキュラムと連携としてと、ご報告をいただきましたけれども、アメリカの大学でも例えば授業のプリントとかも図書館のほうでコピーして、それで学生に販売するというようなことなんかもやっていたので、私はそれはコピーライトの問題があって、多分アメリカでは勝手にコピーしちゃいけないとかいうようなこともあったのかなと思うんですが、図書館が非常に教務関連のことと一緒に仕事をやっているように思いましたので、何かこれからやっぱり日本の図書館もそういう形で進んでいく必要があるのかなというのを感じております。

それと、これはちょっと今、切実な問題が1つあってお教えいただきたいんですけども、司書課程のことでご相談がございまして、司書課程の養成のために専任教員が2人必要になったとかということが文科省からの通達でございまして、ただ、うちの大学は1人しかいなくて、もう1人専任をとらなきゃいけないんだったら司書の課程はやめてしまったらいいんじゃないかというような乱暴な意見も出てきているんですけども、そういう中で何か図書館と一緒にやって司書課程の充実を図ることができないかなと、今、個人的に考えましております。

ですので、既に図書館で司書課程のカリキュラムと何か連動してやっていらっしゃるところがあれば、お話を聞かせていただければ幸いです。

今のご質問もございましたけど、いかがでしょうか。何かお答えいただけませんかでしょうか。

私どもも司書課程があるんですけども、客員教授で1人、専任をとったんですけども、それは私どもの図書館の課長で退職した者を客員教授で1人、それからあとは司書の資格を持っている図書館の職員が勤務時間外、4時半以降ですから5限目ということになりますが、その時間に講座を2人の者が担当しております。それは、ふだん図書館のレファレンスに座っていたりするような職員が図書館に大変興味を持っている学生の場に出ていって、司書はこういうふうな仕事をするんだということを実際に教える。それで、学生の教育に対しても非常にいいですし、将来図書館のアルバイトをしながら図書館の職員になろうかななんていうふうに考えている学生も出てきているようです。

それから、もう1つ、戦う図書館の問題ですけども、これも非常に切実な問題でして、私も就任したときには、やはり図書館というのは厄介者のような扱いを受けているところがあるんです。特に人事考課なんかが大分どこの大学でも行われるようになってまいりますと、むしろもっと派手な部署、年々企画をしたり、あるいは新しいことをどんどん立ち上げていったりというような部署に人気が集まりまして、そういうふうなところで顕著な功績を上げた職員が人事考課制度でかなり高いポイントをもらっている。

ですけど、図書館というのはいかにルーチンワークをしっかりとやるかというのがベースにあって、

それをまずしっかりやりながら、図書館というのはそれぞれの部署の核になるんだということを強くアピールしていこうということを3年ぐらい前から始めています。それで、学生の選書会議には教職部門の職員さんの分野から4セクション、学生部、それから教学面、それと就職、情報センター、こちらから入ってもらって選書に協力してもらっている。それから、独自に教職講座のほうのバックアップとして、夏休みなんかには教職関係のそういう講座をきちんとやって、図書館で必要な本ですとかを提供する。

それから、就活の時期ですけれども、年が明けてからは進路とはむしろ別個に、進路はどうしても企業さん向けの情報しか学生に与えませんので、表の顔しか学生は見られないです。そうじゃないんだよと。実際にこの会社はこんなに借金があるんだとか、この会社はこういうふうな経営をしているんだというふうなことを日経テレコンですとか客観的なデータベースを使って就職支援をしていく。これは大変学生に好評でして、学生の利用が非常に伸びています。それから、就職活動に対しても非常に寄与しているということで、図書館を見る目が徐々に変わりつつあるというのが現状です。以上でございますが。

ありがとうございます。

今の話にもございましたように、このテーマは結構大きいと思っております。図書館と例えば教育部門との連携であるとか、あとは免許・資格センター等がございます大学があると思っておりますけれども、うちも立ち上げましたけれども、免許・資格センターの中の司書課程というものと図書館とがどのような連携をしていくかということは、今後、館長懇話会か何か研究会等、どこかでもし取り上げることができましたらテーマとして1つ、他部署、今の先生のほうから例えば学生センターとか就職センター、キャリアセンターみたいなところとも連携ということは可能性があるということで、図書館が孤立しているのではなくて、さまざまな部署と連携していく形で存在意義を発揮していくということは1つの方向性かなというふうに考えますので、ちょっと申し送りしたいと思っております。

15こまやれという厳しいお達しが最近出てきていますので、もしそのうちの1こまを図書館が担う、ほかの先生、14こまでいいよといったら、えらい飛びついてこられるんじゃないかと思うような、全部の科目は無理ですけど、科目等もございますので、これは私の完全に私見でございますけれども、ひょっとすると教育部門ともうちょっと詰めて話をすると、いろんなことが可能性として広がってくるのではないかなということも考えております。ほか、いかがでしょうか。どうぞ。

今伺っております、私自身の職場ではあまり大したことをやってないというか、十分やれてないんですけども、私自身が司書課程を担当しているものですから、二、三、自分がこういうことを

やりたいなということを含めまして、先ほどの司会者の方が言われたことにも関係するんですけども、一、二点、申し上げますと、まず図書館というのは、公共図書館なんかでもそうなんですけども、何をやってもいいんです。何でもやれる。逆に言うと、何をしているかわからないというような性格がある機関だろうと思います。

私の友人のところだと、公共図書館なんかでは郷土に伝わる古いお年寄りの、70、80ぐらいのおばあさんしか知らなかったような民話を記録しまして、それで最終的に劇をつくったりCDをつくったりして、その図書館でそれを販売じゃないですけど配布したり、そういうことも図書館でやっているというようなところもあります。

これは大学図書館ではありませんけども、そういったような趣向で、図書館というのはあまりみんな何をするとところかわからないというのが、逆に非常に発想の自由につながる可能性を秘めていると思います。今、司会者の方がおっしゃったように、就職課の仕事との連携とか、あるいは本学は医学部がありまして、学生相談室というところにカウンセリングの専門の医者が数名いるんですけども、その人たちの対応を見ていますと、やはりかなり専門的ではあるんですけども、日常的な学生が片づけなくちゃいけない、単位をとらなくちゃいけない問題とか、そういうのは別にカウンセリングの仕事とはちょっと関係がないわけです。

ということは、そういうところとの連携、この学生は単位をとる上で非常に問題を抱えているということがわかっているんですけども、ちょっと組織的に対応しにくいとか、それから教務との連携はもうご存じの方も多いかと思いますが、パスファインダーとか、学生の科目ごとの道しるべといいますか、そういったものをつくってあげるといったようなところは図書館の仕事になるんですけども、これは教務課のシラバスの、その次の仕事になりますので非常に連携性が高い、もともとそういうものを持っているかと思います。

それが1点と、それからもう1つは、先ほどの先生でしたっけ、図書館の司書課程との関連ということでおっしゃったんですけども、来年からですか、法律が変わりまして司書課程もまた変わるわけですけども、その最大の特徴というのは、戦後、日本の図書館の司書という資格は、もともとは基本的に現職教員の再教育をねらった、講習を終えたら資格を与えるよというものだったんです。それが半世紀以上続いていたわけです。

ところが、実際やっているところはいろんな大学や短大でもやっているということで、それは現状に合わない、ずっとそういう問題があったんですけど、今度、法律改定されまして、基本的に大学における教育の中で図書館の司書を育てるといいますか、そういうふうにはっきり変わったわけです。

これは、とらえようによっては新しく司書課程というものをデザインできる非常に好機ではなかろうかと思います。

私のところではまだ実行してないので、やれなかったらちょっと恥ずかしいんですけども、実習というものを1つ、図書館サービス面の実施を学内でさせて、司書課程で学んだ3・4年生を使って自分とこの大学の図書館で実習させて、下級生といいますか、1・2年生に対する利用指導とか、OPACの探し方とか、そういったことをさせて単位を与えていくというような設定を構想中というか、まだうまくいくかどうかはちょっとわからないんですけど、そういうことを考えております。以上です。

貴重な情報をありがとうございます。また進展したらお聞かせいただければと思います。

あっという間に時間が参りまして、1時から次の会がございますので、そろそろ閉じさせていただきたいと思っておりますが、館長懇話会、今年、ちょっと私の運営がまずかったんですけども、一応こういう形に戻しましたけれども、こういう形でどうでしょうかとお聞きするのもあれですけども、今後も方向としてはこういう形でやっていきたいな、もっとテーマをこちらで選ばせていただきまして、ざっくばらんに話をできるような場にしていきたいと思っておりますので、もし何かご意見等、今ございましたら。あるいは、また部会長の本学のほうにでもご連絡いただければと思いますけれども、いかがでしょうか、一言でも何かございましたら。よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。ほんとうにつたない進行で申しわけございませんでした。

そうしましたら、本日の館長懇話会、これで閉じさせていただきます。ご協力ありがとうございました。(拍手)

了